

漢字の成り立ちからみる書体の正体 どの書体が偉いのか？

実印をお持ちの方は多いだろう。

その実印、だいたいがへんな書体で彫られている。

偽造防止とか、もっともらしくとか、そういうこともあったりするのだろう。書体の歴史を大西克也さんに聞いた。

東京大学大学院人文社会系研究科教授

大西克也

●おおにし・かつや 1990年東京大学大学院人文科学研究科中国語学専攻博士課程退学。専門は中国語学・中国古文字学。戦国・秦・漢時代の出土文字資料の解説、秦による文字統一の実態、文字政策を探究している。

漢ではなく秦だった

——活版印刷で、古風な書体の名刺を作ってみたら、立派な人になった気がしました。書体によってこうも違うものかと実感しました。

たしかに書体によって印象は変わりますね。そもそも書体というのは「場」と結びついていますから。ど

んな書体で刷ったかによって、その人が立派に見えるということもあります(笑)。

——「漢字」は、「漢」の時代にそのルーツがあると思いがちですが、始皇帝で有名な秦(紀元前二二〇〜紀元前二〇六)の文字が、いま私たちが使う漢字のルーツとなるんですね。そうです。それ以前にも甲骨文字などがありました。文字の統一が

図られたのは秦の時代です。

中国の戦国時代、西暦でいうと紀元前五世紀から三世紀くらいは、文字が非常に多様化していました。それが秦の天下統一によって、文字が統一されていくようになったんです。ですから、私たちが使っている漢字の書体も秦に由来するところが大きいと言えます。

広大な土地を治めるために、秦は

法律に基づいた統治を強く押し進めました。法令を隅々まで行き渡らせるには文字は非常に重要です。地域によってバラつきがあれば、読み解くのに時間がかかりますし、場合によっては統治者の意図が行き渡らない可能性があります。

政治にとって文字は非常に大きな意味を持っているわけで、たとえば地方の郡の長官などは、直接、秦から派遣された人物かもしれません。末端の役人は現地の人を採用していたでしょう。雇われた末端の役人か



篆書でつくられた某社の社判。請求書などに押す。たしかに「未払いは許さん!」的な威厳をかもしたす

らすれば、秦の政策を理解し、順応しなければ生きていけないわけですから、文字が統一されていなければ仕事ができない。

この時代の文書は、竹簡といって竹に書かれていました。秦の中央から送られてきたその文書は、郡でまづコピーをとります。といっても今のコピーではありませんよ(笑)。一字一字正確に書き写すのです。その書き写した文書を、今度は郡の下位である県に送る。県もまたコピーし、お上の命令を人々に伝えていく。その反対も同じです。たとえば上からの指令によって行われた調査の結果を、県から郡、郡から中央に上げていくときも、コピーをとっていきます。このような役所のあり方はいまにつながっていますね。

では、具体的にどんな文字でどんなふうに書かれていたかというところ

まず文書に押されるハンコは「篆書」という曲線の多い文字です。いまでも私たちが実印で用いるような文字が使われていました。篆書のほうが漢字の古い形を残していますし、曲線を多用するので書くのに時間がかかります。

竹簡は、長さは二六〜二七センチ、幅は〇・六〜〇・八センチくらいのもので、幅がありませんから、一つの竹簡に一行の文字しか書けません。行政の文書は早書きの隸書れいしよで書かれているものが多く、しかも一行しか書けませんから、何本も束ねてヒモでしばっていました。竹簡はかなり細長いものですから、自然と縦長の文字が多くなる。文字を書くスペースが書体に与えた影響は小さくなかったと思いますね。

行政文字は、短時間でたくさん文字を書かなくてははいけないから、起